

# 身体の動きを伴う幼児の活動の評価の諸相に関する研究 — 領域「健康」における子どもの育ちを読み取る視点を広げるために —

西 垣 吉 之<sup>1)</sup>・西 垣 直 子<sup>2)</sup>・橋 村 晴 美<sup>1)</sup>

## Consideration about the Diverse Aspects of the Evaluation of the Play Activity of the Infant with the Physical Movement — To Expand the Viewpoint of Reading the Growth of Children in Mental and Physical Health —

Yoshiyuki NISHIGAKI, Naoko NISHIGAKI, and Harumi HASHIMURA

本研究では、身体活動や運動を伴う遊びに取り組む幼児の活動場面を抽出し、身体機能の発達と心の動きが密接に関連していることについて明らかにしながら、保育実践の場で子どもの実態を健康領域から読み取る際、観点拡大の一助となることを目的とした。結果、①身体の位置を正しく保とうとする生理的な感覚が揺さぶられることによって起こる感情の動きに従ってさらに身体を動かすことで、幼児の中に身体の機能を高めようとする動きが起きる。②こうしたいという意味が存在することで、身体機能をその意思に従って動かし、身体機能を高めることにつながる。③周りの子と同じ目的を持って活動することが身体の動きを調整することにつながり、身体機能が高まることになる。④知識の獲得・言葉の獲得・比較して捉える力（あこがれ）・思考する力・関連性の理解・つもりの世界で動く力などが身についていくことと身体の動きが連動することによって、身体機能が充実していく。⑤友達とのコミュニケーションが育まれることでより複雑な身体の動きが可能になり、身体機能が充実していく。以上の内容について確認できた。これにより、幼児の身体機能の充実に向けた手立てへの示唆を得ることができた。

キーワード：領域「健康」、身体機能の充実、健康な心と身体、感情の動き、教師の援助

### 1. 研究の背景と目的

#### (1) 幼児期運動指針について

平成19年度より3年間に渡って実施され、まとめられた「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動のあり方に関する調査研究」をもとに、平成24年文部科学省（2017）幼児期運動指針策定委員会によって出された「幼児期の運動指針」第2章「幼児期における身体活動の課題と運動の意義」の中で、多様な動きを含む遊びの経験が少なくなっていることや活発に体を動かす遊びの減少や体の操作が未熟な幼児の増加、自発的な運動の機会の減少などが指摘されている。また、体を動かして遊ぶ時間

や環境が少なくなっていることが指摘された。これを受け、幼児期における運動の意義として、以下の5つの視点が挙げられた。

表1. 幼児期における運動の意義

- |  |
|--|
| ①体力・運動能力の基礎を培う<br>・運動を調整する能力や危険回避の基礎となる能力が向上する           |
| ②丈夫で健康な体になる<br>・健康を維持するための生活習慣がつくられる<br>・丈夫でバランスのとれた体になる |

1) 教育学部子ども教育学科 2) 岐阜聖徳学園大学短期大学部（非）

表1. 幼児期における運動の意義 (続き)

- ③意欲的に取り組む心が育まれる
  - ・意欲的な態度や有能感を形成する
- ④協調性やコミュニケーション能力が育つ
  - ・感情をコントロールし、友達と上手に遊べる子になる
- ⑤認知的能力の発達にも効果がある
  - ・脳の発達を支え、創造力豊かになる

これに引き続き、運動指針では、幼児期における運動の配慮事項と保育者・保護者に向けた提案がまとめられ、幼児教育・保育の現場における幼児の運動に対する考え方の指標となっているところである。

## (2) 幼稚園教育要領にみられる身体の発達に関する考え方について

それでは、幼稚園教育要領では、幼児期の運動についてどのような捉えがなされているのだろうか。幼稚園教育要領第1章総則 第1「幼稚園教育の基本(文部科学省, 2017)」において、教育活動を展開していく際に、幼児の特性を次のように捉え、以下に示す事柄を重視して行うことが求められている。

表2. 幼稚園教育の基本(抜粋)(下線筆者)

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

幼稚園教育の基本1では、情緒が安定することが自己を十分に発揮することにつながり、心身の発達に必要な体験を得られるという幼児期の特性に鑑み、幼児の主体としての活動を促し、幼児期に相応しい生活が展開されるようにすることが謳われている。2では、自発的な活動を通して、心と体の調和のとれた発達が可能になること、3では、幼児の発達は心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられるものであることや、幼児の生活経験が異なることから、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導が行われるようにと訴えられている。

この幼児教育の基本に関する3つの項目から、身体の発達に関連した内容に着目すると、①心と体は別々に育つものではないこと、②心身の発達を促すためには幼児の主体的な活動が展開されることが望ましいこと、③幼児期に相応しい生活の中で心身の発達が促されること、④幼児期の心と体の調和のとれた発達は幼児の自発的な活動を通して促されていくこと、⑤幼児の発達は様々な側面の発達を捉えることができるが、一つひとつの側面が独立して発達する訳ではなく、身体的発達や心の発達が相互に関連しながら成し遂げられていくこと、⑥幼児の発達は多様な経過をたどって成し遂げられるものであること、これら6点を確認することができる。

さらに、平成30年度の幼稚園教育要領改定において存続した子どもの発達を捉える窓口、領域『健康(健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。)]では、3項目の『ねらい』と10項目に渡る『内容』、6項目の『内容の取り扱い』がまとめられている。特に内容の取り扱いの(1)(2)(3)に注目してみると、次のようなことを読み取ることができる。

## (3) 幼稚園教育要領 領域「健康」の「内容の取り扱い」の項目から読み取れること(文部科学省, 2017)

表3 領域「健康」の内容の取り扱い

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存

在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。

- (2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。
- (3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。

内容の取り扱いの(1)においても、心と体の健康が相互に密接に関連があることが押さえられている。また、体を動かすことを気持ちよいと感じる心の動きを繰り返して体験することが、自ら体を動かそうとする意欲を生み出すことにつながると言っている。また(2)では、幼児の興味や関心という心の動きを土台に、全身を動かす体験を何度も繰り返すことによって、体を動かす楽しさが強化されていくことや、そうした気持ちを育むことによってこそ、幼児が多様な体の動かし方を体験しようと動き出し、体の動きを調整する運動機能的な発達を促すことが説かれている。続く(3)では、幼児は教師や周りの子ども達との温かな関係性が育まれることによって、伸び伸びと戸外で体を動かす体験を自らするようになることや、その体験を重ねることによって、体の諸機能の発達が促されることについて押さえられている。

#### (4) 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿「健康な心と体」について

平成30年度の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定に伴い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目にわたり示された。この10項目は、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際

にこれらの10項目を念頭において教育を行うように示されているものであるが、特に身体の発達に関する部分では、＜健康な心と体＞を挙げることができよう。

この項目では、「健康な心と体 幼稚園生活の中で充実感や満足感を持って自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせながら取り組み、見通しを持って自ら健康で安全な生活を作り出していけるようになる」と、心と体が健康と連動していることが明記されている(文部科学省, 2017)。また、中央教育審議会の初等中等教育分科会・教育課程部会・幼児教育部会「幼児教育部会取りまとめ(2016)」では、「健康な心と体」の内容として、①安定感や解放感を持ちつつ、心と体を十分に働かせながら、充実感や満足感を持って環境に関わり行動すること、②全身を使って活動することを繰り返す中で、体を動かす様々な活動に目標を持って立ち向かったり、困難につまずいても気持ちを切り替えて自分なりに乗り越えようとしたりして根気強くやり抜くことで活動意欲を満足させ、自ら体を動かすようになる。③適切な活動を選び、体を動かす気持ちよさや自ら体を動かそうとする意欲を持ち、いろいろな場面に応じて体の諸部位を十分に動かし進んで運動するようになること等が記載されている。

「健康な心と体」という表記や内容①からもわかるように、ここでも心と体の発達が連動していることや、②と③の内容から、体を動かす活動に取り組むことで気持ちを切り替えや試練を乗り越えようとする態度、さらには根気強くやり抜くことができ、また体を動かす心地よさを感じ取った経験が根底にあることで自ら体を動かすようになり、それが体の諸部位の発達に関わっていることが明記されていることがわかる。

#### (5) 幼児期運動指針・幼児教育部会取りまとめ・幼稚園教育要領から読み取れたこと

このように、幼児期運動指針や幼児教育部会取りまとめ・幼稚園教育要領を概観してみると、幼児の体と心の発達に関して、次のような要点をまとめることができる。

- ① 幼児の発達は身体という一つの側面が独立して発達するのではなく、身体的な発達と心の発達は相互に関連している。



- ②心の健康と体の健康は密接な関連がある。
- ③体を動かす楽しさや心地よさの強化が運動機能の発達を促す。

つまり、幼児教育においては、身体機能や運動機能のみを取りあげて伸ばそうとするのではなく、幼児の心の持ちようやその育ちと連動していることを意識し、保育を組み立てていくことが求められているといえよう。

そこで、本研究では、保育実践の場における身体を伴う活動の記録を通して省察しながら、幼児期運動指針や幼児教育部会取りまとめ、幼稚園教育要領で言及している身体の健康の発達が幼児の心の動きと密接な関係にあることについて実証することを目的とする。さらに、①～③の要点以外の観点で幼児の身体機能の発達について事例検討を通して読み取れた内容について整理し、子どもの実態を健康領域から読み取る際の観点を広げる一助としていくことを目的とする。

## 2. 研究方法

- 1) 幼児の運動遊びや体を動かす活動場面を抽出し、表4の3つの視点に応じて複数の目で省察した。

表4. 身体の健康の発達が幼児の心の動きと密接に関与している分析基準

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 身体的な動きが起きている際の内的世界の変化を捉える</li><li>② 幼児の身体的動きが幼児の心の動きに起因している場面を捉える</li><li>③ 幼児の心の動きが身体の動きを引き起こしている場面を捉える</li></ul> |
|--|

### 2) 研究対象事例

#### 【事例1, 2】

日本保育学会第62回大会発表要旨集(2009年5月)に掲載した『身体の動きを生み出す保育環境を構成する保育者の役割について』で利用した事例を今回の研究目的に応じて再考察を行う。

#### 【事例3～7】

事例採取期日：2017年5月下旬

事例採取対象：K市B園 4歳児の運動遊びの公開保育場面

#### 【事例8】

日本保育学会第65回大会発表要旨集(2012年5月)に掲載した『運動遊びにおける子どもの育ち－身体による育ちと心の育ちの関連に焦点をあてて－』で利用した事例を今回の研究目的に応じて再考察を行う。

#### 3) 事例検討について

事例検討においては、保育を専門とする複数の研究者らによって行われた。

なお、本論に記載されているすべての記録事例について、記録者本人に本研究で利用させていただくことについての承諾を得ている。

## 3. 結果と考察

### 1) 事例1・2の結果と考察

#### 【事例1】砂でできた坂を何度も下る行為(2歳児10月)

身体的不安定さから来る心の動きに応じ身体を動かすことで身体機能が高まっていく姿

3名の2歳児が砂場で穴掘りをしていた。保育者も一緒に穴を進めた。保育者には掘ってからその穴を温泉に見立て楽しもうという思いがあった。しかし、穴を掘り進めるうちに、穴の横に高く積み上がった砂山ができた。それを見ていた3人の中の一人、H男がその砂山に登り、坂になった砂山のとっぺんから穴の底まで何度も下っていった。下るときには、砂に足が埋もれてしまい、体のバランスを崩すこともあったが、何度何度も繰り返し上っては下りてを繰り返した。
--

#### ① 身体が不安定な状態になることを楽しむ

保育者は「温泉遊び」を期待したが、A男は、砂を積み上げることによって変化していく砂山を目にし、そこを上って自分をイメージし、上ったり下ったりを繰り返すことになった。実際に上ってみると、自分自身の体の一部である足が砂に埋もれていくことによって、バランスが崩れ、一瞬不安定になったと推測できるが、その行為を繰り返す姿から、そのこと自体に面白みを見い出したと捉えられる。

## ② 不安定になることが感情を生む

この場面からは、幼児が自分の身体が不安定になることで、①いつも感じている平衡感覚やバランス感覚にズレが起こり、ズレそのものを楽しもうとしたり、あるいは②そこで生まれてきた不安定さを調整しようとする気持ちの動きが起きたと考えられる。この両者には共通して「ワクワク」「ドキドキ」といった感情の動きが伴っている。2歳児は、身体の動きが安定してくる頃であるからこそ、不安定になる自分の体を、安定している時の身体感覚と比較してとらえていると考えられる。そして、その不安定さにあえて身を置き、立て直そうとする意思を動かすことで、そのとき持ち合わせている身体機能をフルに活動させながら、その機能を高めていくのではないだろうか。

人は、日常味わっている身体感覚にズレが生じることで、それまで感じたことがない新たな感情の動きを経験する。例えば厚さ30センチのふわふわするマットも子どもに様々な感情の動きを経験させる。マットはその上を歩くとふにゃふにゃして不安定であるため、身体が常に揺れているような感覚を味わうことになる。また下方から身体を押し上げてくるような不思議な感覚、それでいて倒れても守ってくれるような感情が起きる。そのため、子どもにとってマットは、自身の身体の動きを関与させることによって様々な感情の動きを生み出す物的環境となる。子どもはマットの上で動き回りながら、自分の身体が不安定であることを楽しむと同時にバランスを保つ面白さを味わったり、多少乱暴なことをしても自分自身の身体を受け止めてくれるマットに飛び込みながら恐怖感と安心感の狭間を行ききしたりする。そして知らず知らずのうちに、身体機能が高まっていく自身の育ちを感じていくのである。

**【事例2】 駆け引きを楽しむ行為（2歳児 2月）**  
 身体の状態の変化によって起こる不安やスリルを平  
 常に保とうと身体の状態を調整する姿

伸縮性のある1m幅の布を三つ編みにしたロープ（約3m）を準備した。そのロープを引っ張って遊んでいる場面である。最初は木に片方を結びつけた状態で引っ張る。3人の子がワーワー、キャーキャーと騒ぎながら引いていた。しばらく

すると疲れたのか、やめてしまう。次は保育者が片方を持ち綱引きをした。最初、子ども達は力一杯引いてきたので、保育者は「もうだめだ！」などと言いながら大げさに転んで見せた。次に思い切り子どもが引っ張っている頃合いを見て急に保育者が力を抜いた。すると子ども達は後ろにばたばたと倒れた。何度か繰り返すと次第に子どもの引っ張る力が弱くなる。明らかに思い切り引っ張らないように力を抑えているといった感じである。子ども達が保育者の気持ちを読んでいるようにも見える。「今度はいつ放すつもりだ？」とでも言わんばかりだった。

## ① 身体が不安定な状態になることと思考すること

子どもにとって、固定化された環境構成では興味の持続が起こりにくいということは想像に難くない。木に結びつけられたロープは子ども達が同じような力加減で引っ張ったときには、ほぼ同一の伸縮を起こす。子どもにとっては変化がないために活動に飽きがくる。しかし、保育者との引っ張りあいでは、教師の力の入れ具合や抜き具合、力を入れる角度などによって、無数の異なる感覚を子どもにもたらす。この事例のように保育者が時々手加減したり、時には思い切り引っ張ったりする。すると、そのたびに子どもは保育者の引っ張る加減に応答していかなければならない。その都度、子ども自身の力の入れ具合や足の踏ん張り方に変化が起きる。また、保育者が突然綱を放すことは、子どもの身体感覚に突然の不安定さをもたらす。そうしたことが積み重なると、子どもは予測もなくやってくるそうした不安定さにどのように対応するか思考し、身体の動きを調整するようになる。

これは、無意識のうちに「転びたくない」という気持ちの動きから、身体を駆使する姿でもある。このように、保育者が意図的に力の入れ方を加減することによって、子どもの身体の動かし方や状態に変化が起こり、そこに新たな気持ちの動かし方が派生する。

## ② 複雑な心の動き応じた身体動き

またこの活動で、子どもは、保育者の動きや気持ちの動きを敏感に受け止めながら、保育者が力を抜く瞬間を予測し始めていることが分かる。ふいに保育者に力を抜かれることで自分たちが転んでしまう

というスリルを一つの楽しみとして受け止めながらも、一方で「転ぶものか!」と身構えている。こうした一連の身体の動きに応じて、心の中では複雑な感情の動きが起きていることがわかる。そこでは相手の気持ちの動きを読もうとする想像力を発揮している。また、そうした相手の気持ちに応じて自分の心の動きもコントロールするという育ちが見える。

この事例でも【身体の動きと心の動き】は密接に絡み合っていることや、感情が動きに伴ってさらに身体を動かすことで、身体機能が充実していくことが確認できる。そのため、保育者は子どもが自ら身体を動かすことができる環境を意図的に準備するとともに、ちょっとしたズレを起こすという視点をもって関わりを変化させることが重要であることが分かる。

## 2) 事例3～事例7（4歳児の事例）の結果と考察 《本活動全体の概要》

4歳児クラスで5月下旬、「教師や友達と一緒に身体を動かして遊ぶことを楽しむ」というねらいのもと、運動遊びがはじまった。この活動に入る前から、絵本『おいしいのぼうけん（童心社）』の話を教師に読んでもらった子ども達。あらすじの前半は次のようなものである。「昼寝前に、ミニカーのとりっこでけんかをしたさとしとあきらは、先生に叱られておしいれに入れられてしまった。そこで出会ったのは、地下の世界に住む恐ろしいねずみばあさん。ふたりをやっつけようと、追いかけてくるねずみばあさん。でも、さとしとあきらは決してあきらめない。手をつないで走りつづける。」といった内容である。これを利用し、保育者はこの日までに様々な要素の運動遊びを行ってきた。子ども達は、当日、さとしとあきらという登場人物になりきり、一連の運動遊びに取り組んでいた。その運動遊びの事例を活動の流れに沿って取り上げてみる。なお、事例3・事例4・事例5の準備体操等はクラスで行い、その後、事例6・事例7のサーキット遊びはホールに移動して行った。

### 【事例3】保育者と子ども達のサーキット遊びの準備体操の場面（4歳児 5月下旬）

意思の動きによって身体の部位の動きを統合・制御する姿

音楽に合わせ、言葉に応じて手を腰にあておしりを振る。足を閉じたり開いたりする。足を閉じると同時に、両腕を顔の前で揃え顔を隠すような仕草をする。そして足を開くと同時に、腕を肩の幅程度に開く。この動きを保育者の動きを見ながら繰り返す。

#### 意志が存在することと体の動き

この活動では、「足を閉じる開く」と、「両腕を顔の前で閉じる開く」という2つの部位の動きがそれぞれ行われている。その2つの部位の動きが連動することで、全身を動かす運動になっている。異なる身体の箇所の動きが連動されるためには、同時に違う部位を動かすという意味が働かなければ可能にはならない。人は意思によって体の動きを制御するとともに意思によって身体の部位の複雑な動きを統合することができるようになると考えられる。

### 【事例4】2人一組でつながり逃げる場面（4歳児 5月下旬）

同じ目的に向けて身体を動かしながら互いの意思を感じ合う姿

ねずみばあさんになった教師と幼児二人が鬼役になる。他の子ども達はさとし・あきらという登場人物になりきり、ねずみばあさんから逃げる場面でのこと。2人一組になり、10組ほどの4歳児が、それぞれ組を作り、前後2人で並んでねずみばあさんに捕まらないように逃げている場面である。

後ろの子が前の子の肩に捕まった状態で動いている。前の子が少しスピードをあげると後ろの子が前の子の肩から手が離れてしまう。また前の子がスピードを落とすと、後ろの子と前の子の距離がつまり、くっついて歩きにくくなってしまう。最初のうちは、このような姿が多くグループで見られた。しばらくすると、ほとんどのグループで離れることなく、2人一組で逃げるできるようになった。その中でA男とB男は、時々ト



ラブルになっていた。A男が前、B男が後だった。B男がA男のスピードについて行くことができずにいた。しかしB男がなんとかA男にすがろうとするため、B男がA男の肩を引っ張ってしまう感じになっていた。その都度、A男が「引っ張らんといてよ！」と怒ってB男に文句を言っていた。何度かこうしたトラブルがあったが2人ともペアを解消することはなかった。3分ほど経過すると2人ともペースを合わせて走れるようになっていた。

#### ① 相手の思いを感じ動くこと

2人が離れることなく逃げられた理由としては、一つには前の子のスピードに合わせて、後ろの子が自分のスピードを調整していることが予測できる。また、前の子が自分の肩にかけている後ろの子の手を通して感じる微妙な加減を受けて、走るスピードを調整していることが推測できる。後ろの子からは前の子の姿が目に入るので、スピードは調整しやすいだろうが、前の子からは後ろの子の姿を見ることはできない。前の子は見えない後ろの子を「気配」として感じるしかない。このような体を動かす遊びを通して、子ども達は目に見えない相手の思いを感じ、それに応じて動く力を身につけていく。

#### ② 共有の目的を持って動くこと

この活動においては、A男とB男の姿からも分かるように、互いにいやな思いをすることもある。それは互いの意思にそぐわない相手の行動に出会うからである。しかし、活動を継続することで少しずつ互いのスピードを調整するようになり、一緒に鬼から逃げられるようになった。このようにA男とB男はコンビを解消することなく活動が続けられたのは、鬼から逃げるといった目的がA男とB男に共有化されていたからである。鬼から逃げるといったことが彼らにとって共有の楽しみになっていたとも言える。共有の楽しみを継続して感じていたいという思いが根底にあることで、なんとか調整しようとする気持ちの動かし方をしていたのではないかと考えられる。互いに共有の思いを持って活動に参加できるようになった4歳児だからこそ、その場から逃れることなく、身体活動が続けようとする意思が生まれ、その意思を貫くために、彼らはどうすれば続けることができるのか思考し、それが『調整』という機能を働かせたと考えられる。

#### 【事例5】 クラスみんなで手をつなぎ円になる場面 (4歳児 5月下旬)

身体を動かすことが知識の獲得、比較・思考、関連性の理解に関与していると考えられる姿

21人の子ども達が大きな円になり中央にいるねずみばあさん（教師と子ども2人）を囲む場面。教師の「みんなで手をつないでねずみばあさんを丸になって囲ってしまおう」という言葉がけで、子ども達が近くにいる子ども同士で手をつなぎ始める。C男、D子、E子、F男が手をつないでいる箇所を見ていると、C男とD子の両者の距離はかなり接近している状態であった。また、D子と手をつないでいるE子が、その隣にいたF男と手をつなごうとして動くために、せっかくなでいたD子とE子の手が離れてしまう。このような状況があらわにこちらで見受けられた。しかし、2分ほど立つと、円の直径が適当なものとなり、みんなが手をつなぐことができた。

円になる過程では次のような子どもの姿が見られた。円になっていないその状況を見た一部の子どもが、自分自身の位置を、主には後方に移動させることで広げていこうとする。すると次は広がりすぎて、手が離れてしまう子どもがでてきた。それを修正するために、円の直径を小さくしようとこんどは前方に動き、微妙に調整し、最終的に手をつなぐことができた。

#### ① 円をつくる活動で育まれること

円になる場面で、まず、幼児は近くにいる子ととりあえず片手をつなごうとする。そして空いているもう片方の手を他の幼児とつなごうとする。しかし、最初つないだ子ども同士の手が離れてしまうことがある。これは、その時々、瞬間瞬間に対応しようとする子どもの特性によるものである。瞬間に対応するということは、見通しの中で行動していない状態を意味する。このように考えると、クラス全体で円になるためには、全体で円になったときの様相をイメージできる育ちが求められる。つまり、4歳児は全体を見ずに、隣の子とも手をつなぐことに意識がとられるために、全体で手をつなぐことは難しい。しかし自分の身体を実際に動かしながら手が離れた手がつながったりを繰り返すうちに、全

員の手がつながった瞬間が訪れ、喜びを感じていく。そこで感じた喜びを再度味わうために、彼らは円の直径が小さ過ぎれば全員が円に収まることができないこと、直径が大き過ぎると全員の手がつながらないことを、知識として獲得していくことになる。その間に、こうしたらつながらないけれど、こうすればつながるといような、比較して思考する場面があったり、関連性を確認したりしていることが推測される。

## ② 互いを感じ合いながら動くこと

また、幼児には発達に個人差があることは言うまでもない。ある子は、自分の周辺で起こっていることにしか、目を向けることができない。ある子は、全体の子ども達の姿を捉えながら動くことができる。全体を見ることができると、円が小さすぎれば後方に、円が大きすぎれば前方に進み、その円の大きさを調節することが可能になる。またそうした幼児の姿に連動するかのように、動きを感じて周りの子がなんとなく動きながら、全員が手をつないでいくことが可能になる。このように理屈ではなく、感覚的で同調的な動き方が円をつくるきっかけになっていることにも目を向けておく必要があろう。

## 《サーキット遊びの概要》

次にサーキット遊び全般の姿から読み取れた内容について触れる。サーキット遊びには様々な障害が設定されていた。その障害は9種に及んでいる。それぞれの障害は様々な体の動きを引き起こす運動要素によって構成されていた。内容は以下の通りであった(表4)。

このサーキット遊びでは、最初、教師が一つ一つの活動についてどのように行うかについて言葉を添えながら実際にやって見せる機会を持った。その後、幼児が一列に並び9種類の運動遊びを行った。幼児は一人につき6サイクル一連のサーキットを行った。最初の2サイクルは連続で行った。2サイクル終わったところで、④の活動の跳び方について、教師自身になるべく遠くに跳ぶ姿を見せた。また5サイクルが終わったところで、⑥の活動を取り上げ、高ばいの仕方について教師自身がモデルとして示した後、6サイクル目を行った。その間、幼児は、一列になって順番を待ち、前の幼児を追い越すということなく、活動を続けていた。終了時間が近づき教

師が「もうそろそろ終わります」と伝えと、「えーっ」という不満の声が上がった。

また、このサーキット遊びの中で、⑥マットの上で高ばいをする運動遊びについて、教師が子ども達の前で模範を示した。マットの上に紙でできたネズミを置き、このネズミにおなかを食べられないようにするためにどうするかと問い、今まで以上にしっかり高ばいをするように伝え、再度サーキット遊びをし始める。幼児はそのことをきっかけに、以前よりも意識しておしりを高く突き上げ、両腕・両足を精一杯伸ばしそのミッションをこなしていた。また、⑨の場面では、高さの違うねずみばあさんめがけて垂直跳びをするのだが、その都度高さを変えて垂直跳びをしている幼児が多かった。

表5. サーキット遊びの内容

1. コーンをジグザクに走る。
2. 倒れたコーンを跳ぶ。
3. 大型ダンボールをしゃがんでくぐる。
4. 30センチほどの高さの跳び箱の上からなるべく遠くに跳ぶ。
5. 固定したロープを腕の力だけで引っ張りながら進む。
6. マット上を高ばいで進む。
7. 床面から30センチほど高くなった舞台との高さの差を利用して、足を舞台の上に、一方手は床にしておしりを高くして横歩きで3mほど進む。
8. 並べられたフラフープを、ケンパをしながら進む。
9. 壁に貼られた高さの違うねずみばあさんの絵を、垂直跳びをして叩く。

## 【事例6】声を出しながらケンパをする行為(4歳児 5月下旬)

言葉のリズム、身体の動き、こうしたいという意味を連動させながら課題に向かう姿

「ケンパ ケンパ ケンケンパ」ができるようにフラフープがサーキット遊びの一部分に置いてある。ほとんどの幼児たちが無言でケンパをする中、G男だけが「ケンパ ケンパ ケンケンパ」



と声を出しながら跳んでいた。G男は活動中6回ケンパをしたが、6回とも声を出しながら行った。そしてどの回も最後には必ず両手を挙げて「やったー」と言って次のコーナーに移っていった。

#### 声に合わせて動くこと

G男が「ケンパ ケンパ ケンケンパ」と声を出しながら跳んだのは、言葉によって身体の動きをコントロールしようとしたからである。「ケンパ ケンパ ケンケンパ」には言葉のリズムがある。言葉から生じるリズム感を身体の動きに置き換えて、それによって体の動きをコントロールしているのである。また、最後には必ず「やったー」と言うのは、ケンパ自体が彼にとっては難しい活動であるからのようで、その困難をなんとか乗り越えようとして、言葉を利用するという手立てを生み出しているとも言える。またそのように彼なりに考えて課題が乗り越えられたことへの誇らしさが、「やったー」という言葉に表れたと考えられる。

このように幼児は今持ち合わせている能力を駆使し、自分の目的を達成しようとしていることが読み取れる。また言葉とリズム、体の動き、心の動きが連動し、その連動を駆使することによって、課題を乗り越えようとしていることが読み取れた。

#### 【事例7】サーキット遊びにおける跳び箱の場面 (4歳児 5月下旬)

自分と他者の身体能力を比較し、あこがれを持つことで運動能力が伸びる姿

教師が20センチほどの高さの跳び箱から敷いてあるマットをめがけ、なるべく遠くに跳ぶ姿を子どもに見せる。「遠くに跳べないとねずみばあさんに捕まってしまうから」と言いながら教師が遠くに跳ぶ姿を見て、子ども達から歓声があがる。その後、H男がその課題に挑戦をしていた時、教師とはほぼ同じ距離を跳ぶことができた。そのことを取り上げ、教師が他児に紹介する。すると他の子もそれまでより長い距離を跳び始めた。

#### 「すごい」と思うことと身体の動き

この場面で、教師は本気で跳ぶ姿を示し、幼児に、教師に対して「すごい」という感情を起こさせた。

その際、幼児は今自分の持ち合わせている身体能力や、その身体能力に基づいて跳べる可能な距離と比較していることが推測できる。「自分はここまでしか跳べないけれど先生はあそこまで跳べるんだ」と思っているのだろう。比較できるからこそ、それがあこがれになったり、闘争心を沸き立たせたりすることにつながる。また、活動に対する意欲を高めるとともに、「先生に負けるものか」という自己課題を持って活動に向かう姿勢を作ることになったと思われる。さらに周りの幼児もその姿に触発され、意欲を持って活動することで、以前よりも距離を伸ばすことができた。

このように幼児の運動能力の伸長は、身体的な訓練のたまもではなく、彼らがそのとき抱く「心持ち」に大きく左右されていることが読み取れる。

#### 【サーキット遊びに参加する子ども達の全体的な姿に関する考察】

つもりの世界に入り込むことで気持ちをコントロールしたり高揚させたりして、身体活動への意欲を高めたり、少し難しいことにも挑戦しようしたりする姿

##### ① つもりの世界に入り混んで動くこと

事例6・事例7からは、繰り返しサーキット遊びに取り組む幼児の姿や、一人ひとりがこうありたいという課題をもって活動に取り組む姿勢を読み取れた。そのような姿が表れたのはなぜだろう。この活動で幼児は「おいしいのぼうけん」の絵本の世界に入り込んでいる。「おいしいのぼうけん」に出てくる2人の主人公になりきって動いているのである。つもりになることによって、子どもはいつもの自分とは異なる自分を演じることができる。いつもの自分であればがんばれないが、何かになることで少し我慢してその課題に取り組もうとするのである。つもりの世界に入り込むことで、自分の気持ちをコントロールして動こうとするのである。つもりの世界に入り、いつものとは違う自分の力を発揮した幼児は、その結果、できるようになる自分を感じとる。それが自己肯定感を生み、さらに活動への意欲を高め、主体的な活動を可能にする。その結果、知識、技能を高め、より豊かな思考を可能にすると考えられる。

##### ② つもりの世界と現実を行き来しながら動くこと

また、垂直跳びの場面では、自分の力に応じて、

貼ってある対象の高さを選んで跳ぶ幼児の姿から、むやみに跳んでいる訳ではなく、自分の力のある程度分かって跳んでいることがわかる。つまり、たとえつもりの世界で活動していても、一方で幼児は今持ち合わせている自分の力を分かった上で行動しようとしていることが読み取れる。幼児は現実の自分とこうありたい自分の狭間を、つもりになって動く活動に取り組みながら行き来しているのである。ただし、つもりの世界だからこそ、その時の幼児の気持ちは高揚しており、その結果、身体の動きも活発になっていることが推測できる。その結果、課題がクリアされる。その課題達成によって生まれる自信が、その後困難と思える課題にぶつかった時にも、挑戦しようとする前向きな気持ちを形成していくのではないだろうか。

### 3) 事例8 (5歳児)の結果と考察

#### 【事例8】サッカーをする場面 (5歳児 11月)

他者の身体の動きに表現される心の動きを読み取りながら活動が進められる心地よさを繰り返し味わうことで身体機能を向上させてく姿

年長児同士で4月当初からサッカー遊びを行っていた。繰り返し取り組む中で、ドリブルやパスなどが向上していった。11月頃になると、わざとシュートをするフリをして左右にいる仲間の方に身体の向きを変えボールをパスしたり、目と目をじっと見合わせて、パスを通す姿が見られるようになった。

#### ① フェイントをかけること

このエピソードに見られるシュートをする振りをして左右の子に身体の向きを変えてボールをパスすることができたのはなぜだろう。これはフェイントをかける行為である。向きを瞬間的に変えるためには、身体を中心軸の安定が必要である。中心軸がぶれると、自分が向こうとしている方向に向くことは難しい。中心軸がしっかりしているからこそ、左右の動きが瞬間的に可能になる。また、それまで体が向かう方向に働く慣性の力を制御する必要がある。このように幼児が動きを止めるためには、身体的な機能の充実を欠くことはできない。

#### ② 複雑な心の動かし方と身体の動き

一方、身体の向きを変えるためには「意思」の働きを抜きに考えることはできない。向きを変えようという意味が存在するからその指令に従って身体が動くのである。それではこのケースの場合、そうした意思がどのように生まれたのだろうか。まず、その根底には相手をかわして抜かし、ボールをゴールまで運びたいという意味の存在がある。また、相手の動きを予見するという心の動かし方が存在する。相手がどういう動きをするのか、ある程度見越すことができるからこそ、それに応じて相手の裏をかく行為が可能になる。また、相手に対して自分がどういう身体の動きをすればよいかという、相手と自分との物理的位置を俯瞰し、さらにその後、自分の動き方によってその相手と自分の物理的立ち位置がどのように変化するかをイメージしたり見通したりする力が求められる。また、ゴールに向け、直線的に向かいたいという衝動を抑制し、一瞬立ち止まったり、時には目的を達成するために後戻りしたりするなど、相手の動きを読みながら、それに対応する心の動きが働いている。このような意思・俯瞰する力・イメージする力・見通しを持つ力・衝動を抑制する力などは言うまでもなく心の動きそのものである。

このような心の動かし方が複雑にできるようになる5歳児であるからこそ、身体機能がそれに伴ってさらに充実していくのではないか。一方、身体機能が充実することで、さらに意思が生まれ、それによって身体機能がさらに高まるという関連については言うまでもない。

#### ③ 目で合図してパスすること

次に、目で合図してパスする姿についてはどのように捉えればよいのだろうか。これは視線だけで互いの意思を交流しあう姿である。こうした交流がなぜ可能になるのだろうか。まず、「あの子は自分と同じ思いや目的を持って活動している」という認識や「相手チームは自分達が持っているボールを取りに来る存在である」という認識を共有で持っていることで、声に出さない合図で仲間とやりとりをすることが可能となると考える。また、互いの思いや心の動きを観合っているのではないか。その中で「相手は今何を求めているのか」を想像しながらボールをつないでいる。そこではボールと共に思いもつなぎ合っているのである。「まなざしを共有する力」は

「思いを共有する力」を前提として成立するものであるとも言えるだろう。

このように視線だけで意思を通い合わせるためには、相手と同じような体験をした際に起きる感情の動きを、互いに感じ合う場を積み重ねる体験が不可欠である。言葉というツールを利用するのではなく、視線だけによって思いを共有することはこうした体験を繰り返すことによって初めて可能になるものであり、それは、高度なコミュニケーション能力と言える。

身体の動きは、幼児の心の動きを表現している。そうした身体の動きに表れた心の動きを読み取ることでコミュニケーションを図ろうとする力が、こうした運動遊びを通して幼児の中に醸成されることも興味いところである。

このように5歳児にとって心身の動きが連動することによって仲間パスができたなど、良い結果を得た時、互いに心地よい状態になる体験を繰り返すことで、意欲が高まり、新たな目標が生まれ、それが身体の機能をさらに向上させることに結びつくことになると考えられる。

#### 4. 総合考察

今回の事例検討を通して、子どもたちがカラダを動かす活動から、①身体の不安定さから来る心の動きに応じて、身体を動かしながら身体機能を高めようとする姿、②身体の状態の変化によって起こる不安やスリルを、平常に保とうとして身体の状態を調整する姿、③意思の動きによって身体の部位の動きを統合・制御しようとする姿、④周囲の友だちと同じ目的に向けて身体を動かし、互いの意思を感じ合う姿、⑤身体を動かすことが知識の獲得、比較・思考、関連性の理解に関与していると考えられる姿、⑥言葉のリズム、身体の動き、こうしたいという意思の3つを連動させながら課題に向かう姿、⑦自分と他者の身体能力を比較し、あこがれを持つことで運動能力が伸びる姿、⑧つもりの世界に入るこむことで気持ちをコントロールし、身体活動への意欲を高めたり、少し難しいことにも挑戦しようとしたりする姿、⑨他者の身体の動きに表現される心の動きを読み取りながら活動が進められる心地よさを繰り返

返し味わうことで身体機能を向上させてく姿、計9の育ちを獲得していることが確認された。これらを集約すると表6のようになる。

表6. 身体の健康の発達と幼児の心の動きの関連性

1. 身体の位置を正しく保とうとする生理的な感覚が揺さぶられることによって起こる感情の動きに依拠し、身体を動かすことで、機能を高めようとする働きが起きる。
2. こうしたいという意思が存在することで、身体機能をその意思に従って動かし、身体機能を高めることにつながる。
3. 周りの子と同じ目的を持って活動すること、身体の動きを調整することで身体機能が高まることへとつながる。
4. 知識の獲得・言葉の獲得・比較して捉える力（あこがれ）・思考する力・関連性の理解・つもりの世界で動く等の力が身についていくことと身体の動きが連動することによって、身体機能が充実していく
5. 友達とのコミュニケーション力が育つことでより複雑な身体の動きが可能になり、身体機能が充実していく。

#### 【身体機能を高めるために教師に求められること】

幼児の身体機能を高めるために教師や保育者に求められることとして以下の4点にまとめることができた。

- ①保育における身体活動場面におけるエピソードを読み込むと、身体活動と心の動き・感情の動きが密接につながっていることが確認できた。心と体がつながっているからこそ感情が揺さぶられる身体活動が保育において重要な意味があることがわかった。つまり、身体機能の充実を目指すためには、運動能力の向上を目指すためにそのことに特化して訓練的に行うのではなく、子どもの心の動きに揺さぶりをかけるような環境構成や教師の投げかけを心がける必要がある。
- ②幼児の身体機能は他の諸側面の発達が深く関与していることがわかった。そのために、教師は幼児期に必要と思われる諸側面の発達が促されるように、保育活動を組み立てていく必要がある。同時に幼児の活動を捉える際、幼稚園教育要領が訴え



ているように、5領域が相互に関連しあっていることに十分留意し、領域を関連づけながら幼児の発達を読み取る力が求められていることがわかった。

- ③幼児期には、体を動かすことに喜びを感じる幼児に育てるために、運動的な遊びを継続的に行うための環境構成をいかに整えるかに焦点が向きがちであるが、むしろ教師との関係性の中で生まれる幼児の心の動きに着目し、教師と共に身体の動きを伴う感情体験を豊かにすることで、身体を動かそうとする意志が生まれることが読み取れた
- ④幼児は園という場で環境に関わりながら様々な活動を生み出している。今回の読み取りを通して、改めてその活動を通して、生きる力を身につけていることが読み取れた。だからこ、教師は日頃見過ごされがちながくあたりまえの日常の姿を丁寧に読み取り、一人ひとりの幼児の育ちを確認し、再びその実態に応じた環境を組み立てる努力を積み重ねていく必要があることが確認できた。

今後はこの結果を基に、身体機能を高めるために教師に求められる力や手立てについてさらに検討していくことにする。

## 引用文献

- 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』フレーベル館 p5, p6, p15
- 文部科学省・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・幼児教育部会 (2016)『幼児教育部会における審議の取りまとめ』文部科学省 p14
- 幼児期運動指針策定委員会 (2012)『幼児期運動指針』文部科学省 p21-28

**謝意：**本論で利用した事例1・事例2・事例8は、中部学院大学短期大学部を卒業し、保育士として活躍中の馬場佑真氏の記録から抜粋したものである。この使用について快諾していただいたことに感謝の意を表す。